

減肥しても単収確保！

- A牧場では、サイレージ品質向上や草地のリスク分散のため多草種混播に取り組んでおり、すべての採草地を10年以内に自家更新しています。
- 土壌分析・粗飼料分析を欠かさず、必要施肥量を確認した管理を徹底しています。また、有機物を中心に必要なものを適期に必要なだけ施用し、例年、高品質で安定した収量を確保しています。
- 現状に満足せず、自身の草地で種苗会社とアルファルファの新品種の栽培試験を行うなど、日々貪欲により良い草地づくりをしています。



施肥量を抑えても多収の2番草
(R5年8月撮影)

【R5年の取り組み】

～少ない施肥量でも収量を確保できないか～

安定した収量を確保しているA牧場では、主に化学肥料の施肥量を抑えても収量を確保することはできないか、取り組みました。昨年と比較し、肥料の年間施肥量を5kg/10a、スラリーの年間施用量を0.5t/10a減らしました(表1)。

表1 肥料施肥量とスラリー施用量及び肥料銘柄

	化学肥料 (kg/10a)			スラリー (t/10a)		
	基肥	追肥	年間	早春	秋	年間
R4	23	10	33	2.0	3.0	5.0
R5	18	10	28	2.0	2.5	4.5

T Y採草地の施肥標準
〔北海道施肥ガイド：区分2〕
(単位：kg/10a)

窒素	リン酸	カリ
6	8~10	18

	肥料銘柄	窒素 (%)	リン酸 (%)	カリ (%)	苦土 (%)
基肥	BB草643	6	23	4	9
追肥	BB565	15	6	15	

※早春の基肥、スラリーともに土壤凍結が抜けた直後、追肥は1番草収穫後10日以内のタイミングを徹底

【投下された年間養分量の推定】

※ () はスラリー由来
(単位：kg/10a、t/10a)

	窒素	リン酸	カリ	苦土
R4	2.9 (10)	5.9 (2.5)	2.4 (20)	2.1
年間	12.9	8.4	22.4	2.1
R5	2.6 (9)	4.7 (2.3)	2.2 (18)	1.6
年間	11.6	7.0	20.2	1.6

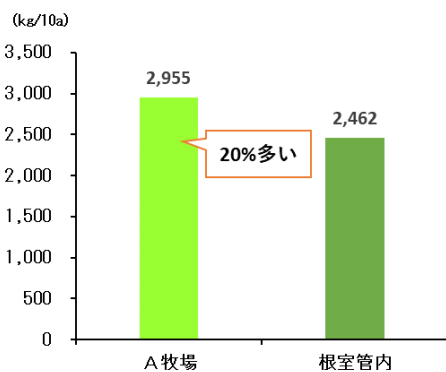


図1 R5年1番草収量 (生草重)
(雪印種苗(株)調査/管内作況調査)

【R5年取り組み結果と今後に向けて】

- 今年の1番草の収量は、前年の同じ採草地と比べて減収しましたが、根室管内を超える収量を確保することができました(図1)。2番草もロールベール換算の収量で、2~3個/haとなっています。
- 次年度は、秋のスラリー量を抑えた草地管理を検討中です。また、今後も変化していくであろう酪農を取り巻く情勢や、当地区の気候変動に合わせて「やれる範囲で出来ること」に取り組む予定です。
- 個人だけでなく関係機関の協力も得ながら、先々を見据えた草づくりを進めています。